シリーズ「共　育」　NO 28

# 10歳までにどれだけの読書量を積んだか

本格的な勉強も大事ですが、小学校低学年の頃に勉強を詰め込んでも、それがずっと将来まで持ち越されるとは限りません。もちろん子供が自分から学習塾に行きたい、英語を習いたい、と言うなら良いでしょう。最初はあまり乗り気でなくても、始めてみたらその子に合っていたと言うこともあります。けれども、現実はそうならないことが多々あります。

何より懸念するのは子供が勉強嫌いになってしまうことです。勉強は、中学・高校と上がるごとに高度になり、じっくり取り組むことを求められますから、勉強嫌いな子は長いレースの途中で挫折してしまいます。たとえ有名な進学塾の入塾試験にパスしても、塾に入れば合格切符が手に入るわけでもありません。必死で勉強してもその塾で下位のままと言う子もいます。難しいテキストをやらされて、自分ができないと言うコンプレックスを植え付けられがちです。そして、勉強は苦しいものになってしまいます。それよりは本です。本は楽しむためのものであり、いくら読ませても、読んであげても、勉強が嫌いになる事はありません。むしろ先のように本で得た知識を広げたい、もっといろんなことを知りたいというように、勉強へのやる気が湧くきっかけになります。一定の勉強も必要ですが、読書の時間もそれ以上に確保してほしいものです。

10歳くらいまでの子供の頭は、まだ「モアッ～」としています。要するに、成長過程の最中ですから、自分自身のことはまだよくわからないのです。その「モアッ～」とした頭に、厳しい勉強だけを課すのは、植物に肥料をやりすぎるようなものです。花は水や太陽の光といった成長において、まず欠かせない大切な栄養の前に、肥料ばかり与えてしまうと、茎ばかりが育っていびつになります。でも、水や太陽の光をたっぷり与えてやれば、花はその花が咲くべき時にちゃんと咲きます。毎日世話をしていると、肥料を与えるタイミングはおのずとわかります。今だなと言う頃合いを見計らえばぐんぐん伸びていきます。（子供も同じです。）

これまで見てきた子供の中には様々なタイプの子どもがいます。最初はそれほど目立った成績でなくても、いざ本人がやる気になったときの、あとの伸びがすごい子もいます。そういう子は間違いなく、小さい頃から本を読んでいる子です。学力のベースが確実にできていて、新しく学んだことを着実に積み上げていくことができます。

# 読書の積み重ね＝運動面での基礎体力

少し話はかわり余談になりますが、運動面で伸びる要素について、私自身の経験からお話をします。私は、陸上競技部の顧問を30年以上受け持っていました。何百人という生徒を指

導してきた中で、いろいろな家庭環境にある生徒とも接して来ました。ある家庭の親御さんは、陸上にとても熱い思いもあり、学校とは別に、家でも子供に熱心にトレーニングをさせておられました。おそらく、小学校の小さいうちからではないかと推測します。入学、入部してきたときには、足のふくらはぎがパンパンになるくらいの筋肉質でした。その女子生徒は、練習を熱心に行いますが、なかなか記録が伸びませんでした（指導の問題もあるかもしれませんが）。これはあくまでも私見ですが、人の体は、成長とともに一定の時期に必要な運動量が必要だと思います。小さいときから、厳しいトレーニングをがんがんさせることが、飛躍的に伸びる要素ではないと思います。小さいうちは、自然に遊びを通じて、楽しみながら体を動かすことで、スポーツの楽しさを実感したり、スポーツを好きになっていくものだと思います。その子が家庭でのトレーニングを好きで、望んでしていたのかはわかりませんが、早いうちから筋肉ができあがってしまうと、骨の成長にも影響を与えます。その生徒は、身長はあまり伸びず、記録も伸びませんでした。また、伸びる時期も人それぞれです。高校生になって伸びる人もいれば、20歳すぎてから伸びる人もいます。

　またまた、余談ですが、近年、特に小学生では、転んだときに腕を骨折したり、転んでも手がすぐに出なかったりして顔を地面に殴打するケースが多いと感じます。平均的に、幼児は一歳前後くらいから、つかまり立ちや歩き出す年齢ではないかと思います。歩行器を使って、早く歩かそうとする親御さんもおられると思いますが、歩くまでに、まずは、「ほふく前進」をしたり、「ハイハイ」をしたりして、足腰、手が鍛えられることが大事です。そのような経験を十分にさせることで腕が鍛えられ、咄嗟の時に手が出たり、腕が強くなっていき、骨折も少なくなっていくのではないかと思います。早く歩かせることが大事ではなく、その子、その子にあった、体力や成長する時期があるので、焦る必要はないと思います。いつか時期が来れば、歩けるようになります。早い、遅いは、大きな問題ではありません。

## たくさんの本を読むか1冊を何度も読むか

　小さい子をお持ちの親御さんは、今からでもたっぷり読み聞かせをしてあげてください。「読み聞かせならもう十分にやっている、または、やってきた」と感じる方もいらっしゃることでしょう。しかし、読み聴かせがこどもの脳にとってどう良いのか、子供の将来のためにどういう良い作用があるのか、明確に理解したうえで行っている方は少ないのではないでしょうか。「読み聞かせは、実は将来の学力に直結する」と言う意識を持つことで、力の入り方が変わってきます。「これまで、あまり読み聞かせをしてこなかった」や「子供がじっとしていられない」と言う場合も心配ありません。すぐ終わるような短い文の絵本から始め、慣らしていけ

ば、やがて毎日本を読んでもらうのが当たり前になってきます。とにかく読む量を積んで欲しいのです。それは、1冊を何回でもいいですし、飽きっぽいお子さんなら、たくさんの本を読むのも良いでしょう。仕事や家事に忙しいとなかなかまとまった時間が取れないことが悩みかもしれませんが、1日の中ですきま時間をうまく見つけて、続けていけば、読書量は確かなものになります。毎日の中に、本に子供が集中する機会を可能な限り持ってほしいと思います。

## 本は最高の知育教材

読み聞かせは、乳幼児に限りません。小学校に上がってすでに自分で本を読めるようになっていても、子供が望めばいくらでも読んであげてください。東大生の親の中には、中二までしていた親御さんもいると言う話を聞いたことがあります。それどころか、親から積極的に働きかけて読んであげて欲しいくらいです。耳から音として聞くのは非常に大切なことで、自分が黙読するのとはまた違った刺激を脳に与えてくれます。小学校では保護者が読み聞かせボランティアをしていますが、そこで小さい子供向けの絵本に小学生が釘付けになっています。ある程度の年齢になっても、子供は本を読んでもらうことを楽しみにします。もう大きくなったからと止めることありません。また、ドリルやテキストのように勉強するわけではなく、習い事のようにどこかに出かける必要性もありません。自宅で普段の生活の中でできる。それになんといっても楽しく面白い、こんなに手軽で有効な教育法はありません。さらに言えば、本が好きな子供になれば、テレビもあまり見なくなり、たくさんのおもちゃもいらなくなります。1人で静かに過ごせる時間も増えるでしょう。